

## 「SF」から「私ファンタジー」へ

講師 眉村 卓 作家

私は子供時代、運動神経が非常に鈍かつたせいもあり、家中で一生懸命漫画を書いてました。四コマ漫画を『漫画少年』に投稿するんですが、だいたい佳作か選外佳作です。そんなと手塚治虫さんの『新宝島』を読み、これは凄い！と。また、木々高太郎、小栗虫太郎とか、科学を材料にした小説がいろいろ出てきて、ことに海野十三は『海底大陸』『火星探險』とか、子供心に非常に楽しかった。そういうことで、自分はのちにSFの方へ方向づけられたようなところはあります。

高校では俳句部でけつこう頑張った。大学は文学部を受けようとしたら父親に反対されて。で、経済学部行つて会

つてたんですね。今考えたらあれが、エンタテインメントの方に入る、ひとつ分岐点だったんでしょう。まあエンタテインメントは自分で面白いものを書いてるつもりで書くと、大体つまらんですね。ちゃんと頭の中で計算もしていかないと。

社に入りましたが、できたら文学で身を立てたいと思った。当時の文学雑誌に毎月のように応募したが、一次予選も通らない。今ならわかりますが、文學のレトリックや高級な比喩を使って、俺はうまいんだぞと。でもその程度の文章書くのはいくらでもいるわけで。

そんなとき『SFマガジン』という雑誌が創刊され、募集もしてないのに原稿送りました。思いがけず編集部（編集長・福島正実さん）から返事が

来て、でも「あなたの書いているものは全然小説になっていない」。要するにプロットをがっちり決めて書かない駄目だと。私は文学というのは好きで、面白だと。でも、経済学部行つて会

筒井康隆さんは、SFなんか書いていて本当に飯が食えるようになるのかねえと言い合つたりしました。も

私がほそぼそ言つたら、筒井さんが、にやつと笑つて「あなた、やめられますかね」と。

SFマガジンの第一回のSFコンテストで、予選通過者に大阪の人がいるというんで、筒井さんと会合に誘う手紙を出した。返事に「お手紙ありがとうございました。当方は体重三十貫のONBORO工場の工場長で」と書いてあつて、で、やつてきたのが小松左京さん。

コンテストの結果は入選作なし。選外佳作第一席が山田好夫「地球工ゴイズム」。私は幸運にも選外佳作の第二席でした。「下級アイデアマン」。豊田有恒の「時間砲計画」が第三席。努力賞に小松左京の「地には平和を」。これは後に直木賞候補になりました。あと、奨励賞には光瀬龍、平井和正など。次の第二回目は、入選が小松左京と半村良。佳作が豊田有恒と筒井康隆。この辺あたりがまあ第一世代のSF作家ということになります。

しかしそれから「SFマガジン」に、なかなか載せてもらえない。もう駄目かと思つていたところに、東都書房のかと思つていたところに、東都書房の原田裕さんが、今日泊亜蘭さんの「光の塔」というのを出して結構面白かつたから、あなたも書かないかと。それで、会社では残業しないために必死で

働き、定刻に帰つては原稿を書く。ある日など、調子に乗つてたら午前四時になつて、仕方ないから酒を飲んで、無理に寝た。目覚めたらまだ薄暗い。おかしいなと思つたら夕方の五時前で、そんな時間から休むとはいえません。無断欠勤になつて、翌日平謝りです。

もともと遅刻が多くて、そろそろクビかなあと思つてたら、うまいことに東都書房が、作品を面白いと言つて本にしてくれた。嬉しかつたですねえ。「燃える傾斜」といつて、主人公がドリーム保険というのにひつかかり、全く知らない世界に連れて行かれる話ですが、銀河系の文明が滅びかけている中、彼の変な発想や感覚がうまくはたらいで、

リーダーみたいな格好になつていくと、いう、考えてみれば私の脱出願望そのもののような話になつています。

この本が東都書房から出たとき、実は、私は早川書房に何の挨拶もしなかった。福島さんからしたら、なんだこの野郎ということですね。福島さんがSF作家クラブをつくった時、当然ながら私は外されまして。私とか筒井さんは入れてもらえないで、だいぶ経つてから入れてもらえたんですが。また、去年がSF作家クラブ五十周年でした。が、私が「燃える傾斜」を出してからも、五十周年になります。

SFを何でやつたんか。新しい自然科学をもとに純文学の技術で書く、たとえばウラシマ効果の中での心理を書くとか、SFのアイデアで「ジャン・クリストフ」みたいなものを書くとかやつていつたらとか思つたんですね。SFは、基本的には落とし轟だと小松さんは言つてて、私は必ずしもそうは思いませんが、とにかく変な発想を

見つけられるかどうかが勝負というところはある。ところが変な感覺を、短い、切れのいい話で書いていると、読者が、全く違うとらえ方をしたりする。赤尾兜子という前衛俳句の人がいまして、ある日私の文章を見て言いました。「眉ちゃん、こんな書いたら駄目だ。これ俳句の文体やないか」要は、俳句の結社の中の、わかりあつてゐる者に読ませる気分で書いては駄目で、ことばを切り詰めすぎると、誤解される。で、たまたまそのころSFマガジンで無期限連載の話があつたんで、今度は書きたいものみんな書く。はじめは二、三百枚ですませるつもりが一六五〇枚。太陽が新星化する惑星の状況を書いた「消滅の光輪」という小説ですが、これが泉鏡花文学賞。三島由紀夫氏が、文章には簡潔体と饒舌体があり、簡潔体のお手本は森鷗外で、饒舌体は泉鏡花だと。私はいわば饒舌体で書いていつたら、それで鏡花賞をいただいたとすることですね。

見つけられるかどうかが勝負というところはある。ところが変な感覺を、短い、切れのいい話で書いていると、読者が、全く違うとらえ方をしたりする。

赤尾兜子といふ前衛俳句の人がいまして、ある日私の文章を見て言いました。

しかし何千枚も、心理描写を入れながら社会や文明の動きも書いていく、というのはだんだん疲労も出てきます。五千枚になると、誰も読んでくれないし、文庫も出ない。書きたいものを書いても載せてもらえない。そんなときに家内が病気になつて、まあ、売れるかどうかはわからないが、商業誌に売れるレベルのものを書くから、読んでくれるかはわからぬが、商業誌に売れるかといつて、一日三枚以上書いていき、一七七八話になりました。

ずっと昔ですが、星さんが「星村さん、エンタテインメント」というのは、ひよつとしたらなまじつか人生体験などいうのがいいものが書けるかもしれませんあ」と言つたことがあります。

私は、SFの中では珍しく作品におけるそれを投影する作家だと言われてたんですが、家内に見せる場合、妻が病気になつて悲しいとか書くわけにいかないから、生の心境は俳句にしていました。

で、家内が亡くなり、真底疲れきつて、これから何を書こうか。もうこれは、

私小説の手法を使って空想的なものを書いたらどうかということで、それで「エイян」というのを書きました。

その後、「沈みゆく人」とか「私」の部分が強い小説を書き、これはもうSFなのかどうかわかりませんが、自分でSFが出てきて、どんどん専門的になってきた。選択肢が狭まっていくほど失っていく、そんな感じになつていて

るようになります。小説である前にまづSFであるということになつてしまふのでは、私は書けない。もう私はSFから置いて行かれて、置いてけぼりで結構だから、自分なりに納得するものを見つけていこうと。ま、これからどうなるか私にもわかりませんが、そういう感じでやっていければと思います。